

上野の 寄り道 散歩道

第3回

「東京国立博物館庭園散策」

東京藝術大学がある上野は、歴史や伝統と新しい文化が交差するスポットとして、観光に訪れる人も多い。藝大のすぐ近くにも、由緒ある杜寺や老舗、意外なエピソードを秘めた穴場が目白押しだ。大学から少しだけ足を延ばして、小さな旅に出てみよう。



1 応挙館

天台宗寺院・明眼院の書院として建立され、東京品川の益田孝（鈍翁）の邸内に移築。その後東京国立博物館に寄贈、移築された。円山応挙が明眼院に眼病で滞留していた際に揮毫したとされる室内の墨画は、現在、作品保護のため複製画に差し替えられている。



2 六窓庵

慶安年間（十七世紀中頃）に奈良・興福寺慈眼院に建立された。明治の初めに博物館が購入し、解体輸送中に船が難破するものの、流失を免れた材を移築。第二次大戦中に再び解体され疎開していたが、戦後、数寄屋建築の名工木村清兵衛により現在地に再建。



東京藝術大学の南東に隣り合う東京国立博物館は、上野の杜のシンボルのひとつであり、注目すべき企画展や充実した常設展示でいつも賑わいをみせている。美術ファンのみならず「上野に行く」といえば、「トーハク（東京国立博物館の略称）で展覧会を鑑賞する」ことを思い浮かべる人も少なくはないほどだ。

東京国立博物館は一八七二年（明治五年）に創設された日本最古の博物館で、本館、表慶館、東洋館、平成館、法隆寺宝物館の五つの展示館と資料館などの施設からなる。観覧者のなかには展示を見てすぐ帰ってしまう人もいるかもしれないが、敷地内には、貴重な茶室をはじめ見落とせない古建築がいくつも点在している。

本館の北側に回り込んだ庭園はかつて寛永寺本坊の庭であったとされ、いまでは各地から移築された五棟の茶室が趣深いたたずまいをみせる。各茶室を西から順に紹介すると、「九条館」は、もと東京赤坂の九条邸にあった建物で、当主の居室として使われていた寄棟造り瓦葺きの建物。入母屋造り瓦葺きの「応挙館」は、尾張国（現在の愛知県大治町）・明眼院の書院だったときに円山応挙が揮毫したみごとな墨画で知られる。「六窓庵」は入母屋造り茅葺きで、慶安年

4 五重塔

高さ五七〇センチメートルの銅製の塔。最上部の相輪には龍が絡みつき、垂木、斗拱の組み物の細部まで入念に作られている。基壇に第五代將軍徳川綱吉が法隆寺に奉納した旨の銘文が線刻されている。



3 転合庵

小堀遠州が桂宮から茶入「於大名(おだいみょう)」を賜った折、その披露のために京都伏見の六地藏に建てたとされる。その後京都大原の寂光寺に移築され、一九六三(昭和三十八)年にゆかりの茶入とともに博物館に寄贈、移築された。



6 校倉

(重要文化財)

鎌倉時代に造られた一間四方の小さな「校倉」。奈良・元興寺の別院十輪院にあった建物で、内部壁面に大般若経ゆかりの菩薩や十六善神が描かれていることから、大般若経を納めた「経蔵」だったことがわかる。



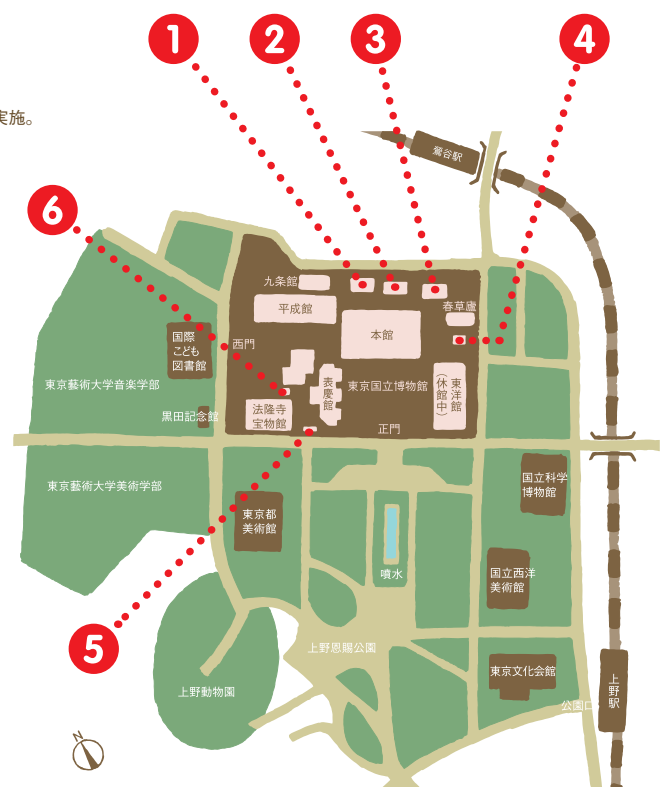
5 黒門

(重要文化財)

旧丸の内大名小路(現在の丸の内三丁目)にあった鳥取藩池田家江戸上屋敷の正門。大名屋敷表門としては東京大学の赤門と並び称される(土・日・祝日は開放。ただし天候により中止される場合もあり)。



*2011年の庭園解放日程:
「春」3月12日(土)~4月17日(日)、
「秋」10月29日(土)~12月11日(日)
上記庭園開放期間にかかわらず、
ボランティアによる「応挙館茶会」
「庭園茶室ツアー」を月に1~2回程度実施。
東京国立博物館ホームページ:
<http://www.tnm.jp/>
お問い合わせ:ハローダイヤル
Tel.03-5777-8600



間(十七世紀中頃)に奈良の興福寺慈眼院に建立された。席は金森宗和好みとされ、「大和の三茶室」と謳われたほどだという。「転合庵」は小堀遠州が京都伏見の六地藏に建てた切妻屋根瓦葺きの茶室で、本館裏から池越しにこの建物を望む景色は東博庭園のなかでも大きなみどころでもある。入母屋造り茅葺きの「春草庵」は河村瑞賢が建てた休憩所。近代の代表的な茶人である原三溪や松永安左工門(耳庵)が一時所有していたそう。庭園内にはほかに徳川綱吉が法隆寺に奉納した、高さ六メートル近い銅製の「五重塔」も建つ。庭園部分は通常公開はしていないが、春と秋の開放期間は自由に散策することができる。また、茶室は茶会・句会などに利用でき(要事前申込、有料)、ボランティアによる「応挙館茶会」「庭園茶室ツアー」を月に一回から二回程度実施しているというのだ。

また藝大への道筋に面して建つ「黒門」と法隆寺宝物館の脇にある「校倉」は、国の重要文化財に指定されている。